

# 名所風俗画に描かれた和歌の浦

——二条城二の丸御殿黒書院帳台の間転用鶴澤探山筆和歌浦図の場合——

## Thoughts on Wakanoura as Depicted in Meishofuzokuga Paintings

米 田 頼 司

Yoritsugu YONEDA

(和歌山大学教育学部)

2012年10月5日受理

### 目次

- (1)はじめに
- (2)近世の名所風俗画と和歌の浦
- (3)鶴澤探山筆和歌浦図に描かれた和歌の浦
- (4)結語
- 謝辞
- 注
- 文献

### (1)はじめに

和歌の浦は、万葉の時代に景勝地としての成立契機があり、平安期以降近世に至るまで代表的な名所の一つであった。従って、筆者の積年の課題になっている和歌の浦の社会誌は、何よりも名所の社会誌でなければならない、ということになる。社会誌とは、社会事象に関する認識を記述に定着させる営みであるが、そのためには、社会事象に精通することで得られる実質的でトータルな理解が必要になる。かくて、本稿における考察では、和歌の浦の社会誌をテーマとする一連の調査研究の一環として、文化的・社会的事象としての名所和歌の浦を如何なるものとして理解し、認識するのかということが焦点となる。

名所とされるには、そこが和歌に詠まれた場所である必要があるという、ある種のメルクマールのようなものがある。この場合、和歌には呪術性のようなものを含めて多様な意味を考える必要があるが、名所としてその場所が呼称を含めて韻文で象徴表現され、即ち、シンボルあるいは記号として象徴作用を有する場所であることが求められる。名所とは、なによりも特定の韻文でその場所のイメージが喚起される、そのようなシンボライズされ、記号化された場所である。しかし、神話に起源する蓬萊山などのような、実際にはどこにも存在しない伝説上の神仙境のようなものではない。実在の場所であり、名のある所として存在することが必須の前提になる。実際に訪れることのできる場所である必要がある。名所となる最初の契機は、その場所が実際に

訪れられ、言わば体験されることにある。実在の場所が歌に詠まれることで名所化するの、そうした事情をも物語っているであろう。

名所は歌に詠まれるだけでなく、絵にも描かれる。歌に詠まれた名所が描かれて名所絵となり、名所絵がまた歌を詠ませることになる。歌と名所絵との相互に創発し合う関係は、そこに象徴作用が成立する文化的磁場が生成していることを示している。この文化的磁場の中で、実在する場所としての和歌の浦から距離を取ることが可能になり、そのことにより特定のイメージを喚起する歌と絵の再生産が促進され、自己増殖を遂げて行く。勿論、そのことで実在の和歌の浦の存在意義が薄れる訳ではない。むしろ歌と絵が再生産され自己増殖することで、訪れるべき場所としての価値は高められる。平安期から中世にかけて、名所が歌枕となり、数多くの名所絵が描かれた(鈴木廣之 2007年 26~47頁)。そして、名所が訪れるべき憧れの地となる。名所としての和歌の浦には、まさにこうしたパターンの典型を見ることが出来る。

### (2)近世の名所風俗画と和歌の浦

名所としての和歌の浦を把握する場合にまず重要なことは、和歌の浦がどのような場所として意味づけられていたのか、あるいは見なされていたのかということである。和歌の浦は、赤人の歌に「神代より然ぞ尊き玉津島山」と詠まれたことから分かる通り、その誕生以来、地霊の住まう海辺の聖地であり、荒磯と洲浜が対照の妙をなすシンボリックな景観の地であった。

即ち、洲浜、潟、磯、波、松、鶴、葦などのシンボルによって編成される不老と再生というメインイメージとその無数のバリエーションとによって表現される、そのような名所であった<sup>(註1)</sup>。

このような和歌の浦の表現世界を母体にしつつも、近世になると、絵画の世界では新たな表現動向が生まれてくる。名所としての和歌の浦の当世風俗が描かれるようになるのである。

絵画史において、中世末から近世初期に名所風俗画というべき絵画が数多く制作されるようになることは、周知のことである。洛中洛外図は数多く知られているが、それに劣らず各地の名所風俗画も多数制作されている。和歌の浦の場合にも少なからぬ作例が確認されるようになっている(和歌山市立博物館 2005年)。名古屋城本丸御殿対面所の和歌浦図はこの時期の名所風俗画の代表的なものの一つに数えることができる(鈴木廣之 2007年 26～47頁、米田頼司 2009年)。図Iは、近年見出された紀州研本和歌浦図屏風(一隻。和歌山大学紀州経済史文化史研究所蔵)の部分図である。筆者は、この屏風の図像読解に着手しているところであるが、生き生きとした当世風俗の描写が特徴的で(和歌山大学紀州経済史文化史研究所 2012年)、中世末に数多く制作された参詣曼陀羅図から近世初期の名所風俗画への展開を考えることの出来る大変興味深い作例である。元々は和歌の浦と巖島を描いた一双の屏風であったと思われる。現在では同様のものが数多く確認されるようになっており、この系譜に連ねることのできる名所風俗画は、17世紀半ばから後半、更には18世紀にも少なからず見出すことができる(知念理 2005年、2007年)。

これらの和歌の浦の名所風俗画に描かれた当世風俗からは、当時の和歌の浦が如何なる場所であったのか、また、如何なる場所として捉えられようとしていたのか、そうしたことにに関して貴重な情報を読み取ることができる。例えば、名所としての和歌の浦は、定型化



図I 紀州研本和歌浦図屏風(部分)  
※和歌山大学紀州経済史文化史研究所蔵

されたイメージとして存在するだけでなく、何よりも訪れるべき場所、あるいは訪れることのできる場所として意識されるようになっていく。こうした意識の形成が数多くの名所風俗画が制作される背景になっていたと思われるのである。

勿論、描かれたものをそのままに鵜呑みにすることは許されない。当世風俗の描写は写生によって得られたものではなく、粉本に相当するものがあり、すでに他の絵画で使用された図柄が繰り返し活用されている場合が普通に見られる。しかし、このことは、描写された当世風俗が単なる“絵空事”であることを意味しない。筆者のこれまでの検討では、和歌の浦を描いた近世の名所風俗画からは、“海辺の開放された聖地”として巡礼をはじめ大勢の人々が訪れる場所という明瞭なイメージが立ち上がってくる。

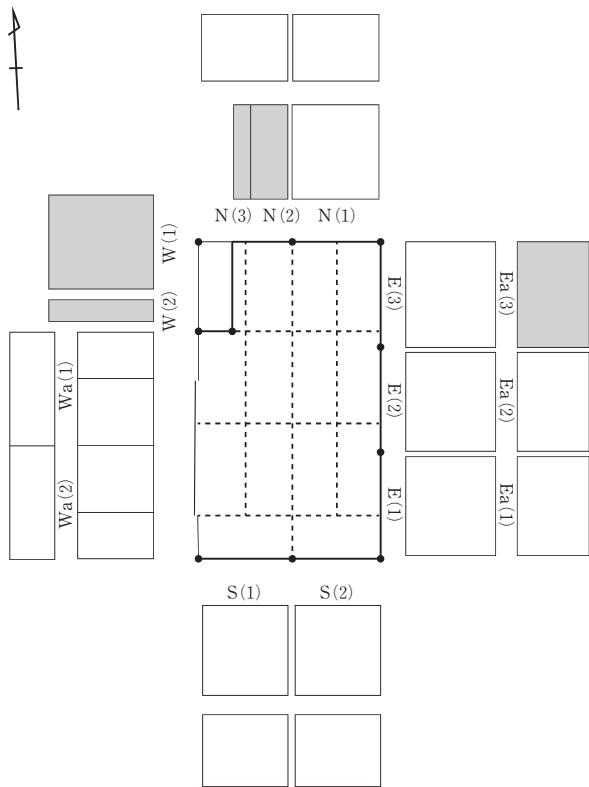
和歌の浦を描いた近世の名所風俗画で、まだ読み取りに着手されていないものや不十分なままに置かれているものが少なからずある<sup>(註2)</sup>。また、先に触れた紀州研本和歌浦図屏風をはじめ、新たに見出される作品も稀ではない<sup>(註3)</sup>。これらの和歌の浦を描いた近世の名所風俗画の読み取りから得られる知見や情報から、近世における名所としての和歌の浦の実質的で確かな像が紡ぎ出されることが期待できるのである。近世の和歌の浦がどのような場所として意識され、理解されていたのかを明らかにする上で、和歌の浦を描いた近世の名所風俗画読解の試みは、大きな意義を有するところになっている。

### (3) 鶴澤探山筆和歌浦図に描かれた和歌の浦

さて、本稿29頁の図III(1)～(5)をご覧いただきたい。これらは、二条城二の丸御殿黒書院帳台の間の障壁画の一部である。描かれているのは、いうまでもなく和歌の浦である。作者は鶴澤探山(明暦元年〔1655〕～享保14年〔1729〕)<sup>(註4)</sup>で、描かれた時期は正徳3年～5年(1713～1715)頃である(本島知辰『月堂見聞集』巻之八)。

探山は、禁裏の御抱絵師として、宝永度女御御殿(全体)の障壁画を筆頭格で担当しており、女御御殿上段の楊貴妃花卉、中段の賀茂祭、下段の海棠、女御御殿姫宮御殿上段の富士三穂、中段の住吉と和歌浦、御里御殿上段の唐子遊官女、中段の大和耕作、各御殿の杉戸の絵を描いている(本島知辰『月堂見聞集』巻之八)。図III(1)～III(5)の和歌浦図は、元は上記の女御御殿姫宮御殿中段の和歌浦図で、それが二条城二の丸御殿黒書院帳台の間の障壁画に転用されているのである<sup>(註5)</sup>。こうしたことの全容が明らかになったのは、最近のことである<sup>(註6)</sup>。

黒書院帳台の間における現状の障壁画は、図IIの通りである。和歌浦図は、グレー部(N(2)、N(3)、W(1)、W(2)、Ea(3))である。Ea(1)とEa(2)は、



図Ⅱ 黒書院 帳台の間



図Ⅲ(2)  
[図ⅡのN(3)]  
タテ(mm) ヨコ(mm)  
1797×302



図Ⅲ(1)  
[図ⅡのN(2)]  
タテ(mm) ヨコ(mm)  
1920×790



図Ⅲ(5)  
[図ⅡのEa(3)]  
タテ(mm) ヨコ(mm)  
1355×1750



図Ⅲ(4)  
[図ⅡのW(2)]  
タテ(mm) ヨコ(mm)  
2142×384



図Ⅲ(3)  
[図ⅡのW(1)]  
タテ(mm) ヨコ(mm)  
2142×1827

※図Ⅲ(1)～(5)の画像及び寸法のデータは、元離宮二条城管理事務所提供による。



和歌浦図と一緒に姫宮御殿中段に描かれていた住吉図で、S(1)、S(2)、E(1)~E(3)、N(1)は、姫宮御殿上段に描かれていた富士三穂図である。いずれも元の姫宮御殿の障壁にどのように描かれていたのかは不明で<sup>(註7)</sup>、転用時に建具、壁面に合わせて貼付けられたために上下左右が切り取られたり足されたりしている。

図Ⅲ(1)と図Ⅲ(2)には、紀三井寺、紀三井寺門前と思しきところと布引の松が描かれている。紀三井寺は西国三十三所の第2番札所であるが、その本堂前にはこれからお参りするであろう、二人づれの巡礼がいる(図Ⅳ(1))。地元民の生活臭が漂う門前と思しきところにも巡礼がいる(図Ⅳ(2))。布引の松<sup>(註8)</sup>は、洲浜にひととき大きな松として描かれている(図Ⅳ(3))。すやりがすみが多用され、描くべき要素を必要最小限に留めて、画面は名所絵風に構成されている。図Ⅲ(3)はこの紀三井寺の図に連続するもので、画面右から三艘の船<sup>(註9)</sup>が描かれ、船中では遊覧の風が見える。とくに屋形舟では、飲食に興じる様子が描かれている(図Ⅴ(1))。詳細に見ると、船首の男性は侍烏帽子を被っており、同乗している女性も皆被りもので頭を覆い、また、垂髪にしている。これは近世以前の中世の風俗である。画面上方の一艘は紀三井寺に向かい、他の二艘の向かう先には、妹背山の全景が実景図(本稿では、当世の景観を写すことを意図したと思われる図を実景図

としている)で詳細に描かれている(図Ⅲ(3))。紀三井寺側からみてゆくと、まず、水面にせり出している観海閣が、入母屋・瓦葺の立派な造りの建屋で描かれており(図Ⅴ(2))、戸や壁はなく、自由に出入りのできる眺望所になっている<sup>(註10)</sup>。慶安年間(1648~1651)に建設されたものであるが、家康の50回忌にあたる寛文5年(1665)の景観を描いたと考えられる和歌御祭礼図屏風に描かれている観海閣とほぼ同じものである。元文4年(1739)に著された全長の『和歌浦物語』では、「東向きの正面に川中へ掛造りの瓦葺きの舞台(三間に七間)有り。川中の柱、床より下は切石にて、舞台は櫓の材木なりと云う」(柏原卓編 和泉書院版 109頁)とある。描かれているのは、それを彷彿とさせるものである。観海閣内には東面に3名の男性、南面に旅姿の女性と少年がいる。観海閣近くの水中に何か生き物でもいるのであろうか、3名の男性がそれを見ようと覗き込んでいるように見える。屋形舟の船首にいる者がこの様子を気づき、観海閣の少年もこれを旅姿の女性に知らせようとしているようにも見える。いずれにしても、大変のどかで、開放的な風情が活写されており、近世の当世景観と中世の風俗とが混然として描かれている。擬古的表現が意味するところについては、後述するとして、更に先へと進むことにする。観海閣の西側にある石段には先導者とこれに続く侍烏帽子を被っ



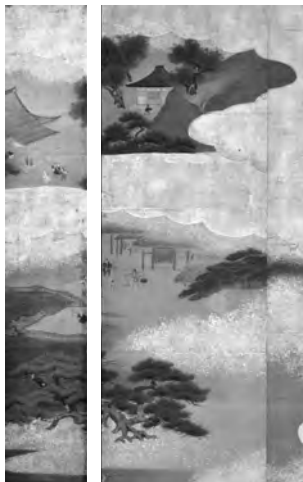
図Ⅳ(1) 紀三井寺本堂



図Ⅳ(2) 紀三井寺門前



図Ⅴ(1) 妹背山方面に向かう船



図Ⅳ(3) 紀三井寺と布引の松

※図Ⅳ(1)~(3)は、図Ⅲ(1)~(2)の部分図。



図Ⅴ(2) 観海閣

※図Ⅴ(1)~(2)は、図Ⅲ(3)の部分図。

た男性の姿がある。多宝塔にお参りするのであろう(図V(2))、唐門の先には拝殿があり、その上方、岩山の松の間に多宝塔がのぞいている(図V(3))。この多宝塔は、承応2年(1653)に紀州藩初代藩主徳川頼宣(家康の拾男)により実母であるお万の方を弔うために建立されたものである(藺田香融 1997年、菅原正明 2001年)。妹背山には、観海閣、多宝塔・拝殿に向かっているであろう人々も描かれている。妹背山に渡るとすぐ右手にある経堂の前では、座って手を合わせる女性がおり(図V(4))、この女性もこの後、観海閣、多宝塔に向かうことになるのであろう。

図III(4)には、妹背山と陸とを結ぶ橋、その上方に鳥居、更に上方の山上に社が描かれている。鳥居は玉津島神社のもので、山上の社は妙見堂である(註11)。妹背山と陸とを結ぶ橋として、石造りの三断橋(註12)が慶安年間に架橋されており、実景としてはこの三つに分かれた特徴のある石橋が描かれていなければならないのであるが、画面にはシンプルな木橋が描かれている。



図V(3) 多宝塔と拝殿



図V(4) 経堂

※図V(3)、(4)は、図III(3)の部分図。

橋上には、妹背山から戻る老人(やはり侍烏帽子を被っている)と彼を案内する子供がいる(図VI)。リアルに妹背山を描いている画面とは対照的に、ここも、紀三井寺の画面と同じく、すやりがすみを多用したシンボリックな“名所絵”になっている。

図III(5)は、図III(4)に続くもので、橋の袂に当たるところに簡易な建屋の店とその背後に鏡山が描かれている。鏡山の右側には、玉津島神社の参道とその先に(画面では上部)に玉津島神社境内が描かれている。画面右側には二人の女性が上がり込んでいる建屋がある(図VII)。これは、歌仙殿である(註13)。この左に唐門とその中に本殿が描かれ、唐門のところでは女性が一人、正座して手を合わせている。女性はいずれも垂髪で風俗は中世を思わせる。歌仙堂は、万治3年に頼宣によって建造されたもので、ここには、当初狩野興甫筆の三十六歌仙の絵が掛けられていた(『和歌浦物語』元文4年〔1739〕〔『和歌浦物語』柏原卓編 和泉書院版78~79頁])。本堂も、これに先立つ万治2年(1659)に頼宣によって再建されたものである。ここでも近世の当世景観と中世の風俗が混然として描かれている。

玉津島神社参道の左側は市町で、その屋並みと通りを行きかう人々の描写は“名所絵”ではなく、風俗が描かれた名所風俗画のそれである(図III(5)、図(5))。市町の先は岩礁のある海岸になっており、絵としてはここで終わっている(註14)。

以上のように絵を辿ると、探山の和歌浦図には二つの大きな特徴があることに気付く。一つは、シンボリ



図VI 三断橋



図VII 玉津島神社本殿と歌仙殿

※図VIは、図III(4)、図VIIは、図III(5)の部分図。



ックな名所絵と風俗が描き込まれる名所風俗画が混在しているところであり、もう一つは、このこととも関連していると思われるが、近世のリアルな当世景観に中世を思わせる擬古的風俗が融合して描かれているということである。即ち、特定の描写対象のみがシンボリックに配置された図様と実景図とが組み合わせられ、更に実景図で描かれた近世の当世景観と中世の風俗が混然一体として描かれているのである。探山は、有職故実や時代風俗にも通暁していたと考えられ、風俗描写に混乱があったとは考えられない。勿論、適当に描かれるということとはあり得ない。姫宮御殿の障壁画として描かれたもので同じく転用画になっている「富士三穂図」と「住吉図」の場合には、侍烏帽子を被ったものはなく、いずれも17世紀初期とみても違和感のない風俗描写になっている(図Ⅷ、図Ⅸ)。近世のリアルな当世景観に中世を思わせる擬古的風俗を融合させた描写は、探山の苦心の表現と考えられねばならないであろう。

実景図で描かれている当世景観は、いずれも慶安年間から寛文5年までに形成され、成立したものであり、とくに詳細に描かれている妹背山は、紀州藩初代藩主徳川頼宣の実母であるお万の方が、家康の33回忌(慶安2年〔1649〕)の追善供養に衆生の救済と天下泰平を願って雄雌一対の題目石<sup>(註15)</sup>を奉置したところである。



図Ⅷ 富士三穂図(部分)



図Ⅸ 住吉図(部分)

※図Ⅷと図Ⅸの画は、元離宮二条城管理事務所提供。

雄石とされる題目石は削平岩盤上に安置され、その下には岩盤が削り抜かれた石室が設けられて、お万の方の発願により集められ15万個を超える経石が埋納されており、法華経が書写された経石の中には、大勢の無名の民衆のものとお万の方をはじめ後水尾上皇、女御たちが手を染めたものがある(和歌山県教育委員会 2010年)、『紀伊国名所図会』(文化8年〔1811〕)にも、

「当山御宝塔は、慶安二年中正院日護僧都の開基にして、則東照神君三十三回忌の御追福として、幾許の小石に法華の首題を書写し給ひ、尚 本院太上皇の叡聞に達し、尊尼の信心深厚叡感のあまり、御宸翰の題目を染めさせ、ならびに公卿百官の所書題目石を贈らせられ、なほまた諸国より集来の題目石、部数二十一万を、すなわち宝塔の下をふかく窟りて、是を収めたまふ。」(『紀伊国名所図会(一)』歴史図書社版 266頁)

という記述があり、妹背山に関わる事績として伝えている<sup>(註16)</sup>。題目石は、承応2年(1653)に建立された多宝塔の中に安置されているのであるが、お万の方の逆修碑でもあった。山上の妙見堂は、多宝塔を守護するものとして、万治3年(1660)に頼宣によって建立されたものである(蘭田香融 1997年)。三断橋と観海閣は妹背

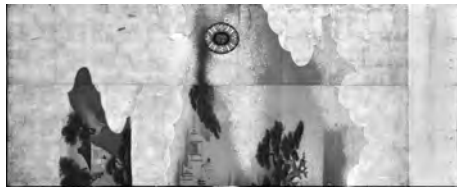


図Ⅹ 三断橋たもとの店 ※図Ⅲ(5)の部分図。

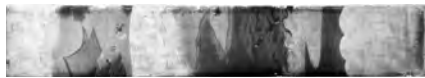


図Ⅺ 『紀伊国名所図会』に描かれた観海閣

\* 図1～図5は、図Ⅲ(1)～図Ⅲ(5)を縮小したものである。



図(1)



図(2)



図(3)



図(4)



図(5)

A



(下段右端に続く)

B

\* 版本では八頁に分割されているが、ここではひと続きの絵とした。

図XII 「和歌浦名所」(『画典通考』卷之三「早稲田大学図書館蔵」)

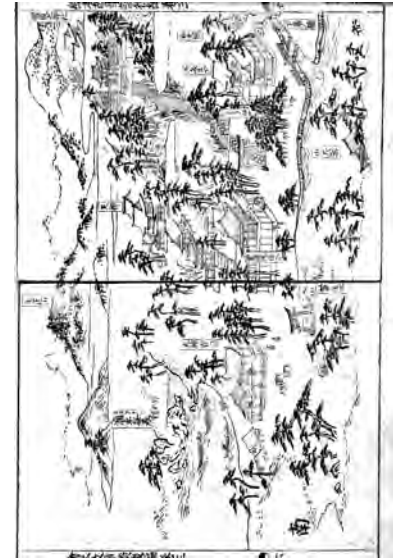


図XIIの部分B



図(5)の部分A

(上段左端より続く)



\* この部分には東照宮と天満宮が描かれている。



山の整備に伴って建造されたもので、慶安4年(1651)頃には完成していたと考えられる。三断橋の玉津島側の袂には、朝日屋と芦辺屋という二軒の茶屋が置かれていた(先に触れたように探山の図にもそれらしきものが描かれている〔図X〕)(『南紀徳川史』第1冊171~172頁)。三断橋を渡ってすぐ右手の経堂には雌石とされる題目石が安置されたのであるが、この前に座って手を合わせる女性が描かれていることは先に見た通りである。観海閣は、後に『紀伊国名所図会』(文化8年〔1811〕)にも描かれ(図Ⅺ)、更に、

「国祖君御造営あり、三つの橋をわたり、山のめぐりは石を畳みて平地とし、山上には宝塔高く聳え、石段くだりて水楼あり。みなみは名にあふ和歌のうら、東面は名草山なり。山水絶妙、言語に絶えたり。かかるやごとなき御制地なるも、下民の遊翫をゆるされ、四季をりをりの間断なく、ここにつどひあつまり、おのがさまざまのしみ興ず。或人は文王の囿に比す<sup>(註17)</sup>、また宜ならずや」(歴史図書社版 一卷267頁)

という記述がある。やはり妹背山と観海閣は、特別な場所として認識され、後にもそのことが伝承されていたということをこの記述は、そのことを物語っている<sup>(註18)</sup>。

玉津島神社は、上皇、天皇の歌が奉納される場所であり、頼宣による修復後は、祭祀には禁裏から勅使が派遣されるようになっていた。すでに明らかなように探山が実景図で詳細に描いた玉津島神社と妹背山は、いずれも頼宣が、お万の方を弔い、家康の50回忌(寛文5年〔1665〕)を期して整備・建造したものであったが、同時にそれらは禁裏にも関わりを持つものであった。その意味で姫宮御殿の障壁に描かれるべき特別な場所であったのである<sup>(註19)</sup>。

こうした探山の和歌浦図を見る場合に是非とも参照されねばならない絵がある。それは、探山に師事した橘守国<sup>(註20)</sup>の「和歌浦名所」の図で、『画典通考』の第3巻に載せられている。図Ⅺ(前頁)がそれで、実景図で描かれている。この絵と探山の和歌浦図とを比べてみると、偶然の一致とは考えられない共通の図柄を直ちに找出すことが出来る(図Ⅺ部分B、図(5)部分A)。図様からすれば、探山の和歌浦図から守国の「和歌浦名所」の図を描くことはできないのに対して、守国の「和歌浦名所」の図を元に探山の和歌浦図を描くことは可能だと思われる。しかるに、探山の和歌浦図は、すでに述べたように正徳3~5年(1713)頃に宝永度女御御殿姫宮御殿中段の障壁画として描かれたものであり、守国の「和歌浦名所」の図が掲載された『画典通



図Ⅺ 和歌浦図屏風(和歌山市立博物館蔵)



考』は享保12年(1727)に版行されたものである。こうしたことから当然のこととして思い至るのは、共通の、あるいは類似の粉本が存在していて、探山も守国もそれを元にそれぞれの図を描いたのではなかろうか、ということである。すでに述べたように、守国は探山に師事していた。探山は狩野探幽の高弟で(その四天王の一人に数えられる)、江戸の鍛冶橋狩野家から京都に送り込まれ、その後、鶴澤派の創始者となるのであるが(野口剛 2004年、五十嵐公一 2010年B)、鶴澤派は直伝に拘ることなく画帳を用いた弟子の養成システムを構築していたとされている(五十嵐公一 2010年A)。両者が共通あるいは類似の粉本を所持していたとしても不思議ではない。『画典通考』が画帳として版行されたことからみても、守国の「和歌浦名所」の図は、粉本に忠実に描かれたものであったと考えられる。とすれば、粉本も実景図で描かれていたものと考えらねばならないのであるが、そうしたことは、和歌の浦を描いた他の現存する作品からも十分に窺える。作例は決して多くはないが、実景図の系譜に位置づけられる名所風俗画が存在する。紀州本東照宮縁起の制作はその起点に置かれるものであるが、町絵師によって描かれたと考えられる和歌御祭礼図屏風(個人蔵)も、紀州本東照宮縁起と同じ構図で描かれており、実景図による名所風

俗画に位置づけることができる。風俗画ではないが、やはり紀州本東照宮縁起と同じ構図で1661年以降、17世紀後半の景観が描かれていると考えられる和歌浦図屏風(和歌山市立博物館蔵)は、紀三井寺から出島、高津子山(高辻山)までを詳細な実景図で描いたもので(図Ⅷ)、守国の「和歌浦名所」の図との近縁性を見ることが出来る<sup>(註21)</sup>。このような絵画の存在は、探山と守国の和歌浦図に共通するか、あるいは類似する実景図で描かれた粉本の存在を想起せしめるものである。

如上のことを踏まえると次の考察が成り立つ。即ち、探山は宝永度女御御殿姫宮御殿中段の障壁画に和歌浦図を描くに当り、実景図で描かれた粉本を用い、それを名所絵風にアレンジしたのである。とすれば、探山は、紀三井寺から玉津島と市町までの範囲を描くに留め、敢えて、粉本にはあった東照宮と天満宮及びそれより西側は描かなかったということになる。そして、名所絵風にアレンジする一方で、妹背山と玉津島神社は粉本の実景図の図柄をそのまま活かすようにしたのである。探山が姫宮御殿の障壁に描かねばならなかったのは、なによりもまず名所としての和歌の浦であったはずである<sup>(註22)</sup>。しかし、探山が和歌浦図の核心部として描いたのは、わずか50年ほど前に形成された和歌の浦の当世景観であった。それらはいずれも慶安年間



から万治3年に掛けて頼宣によって整備されたものであったが、同時に玉津島神社と妹背山は、禁裏ゆかりの場所でもあった。玉津島神社には和歌の神が祭られ、上皇や天皇の和歌が奉納されており(鶴崎祐雄・佐貫新造・神道宗紀 1992年)、妹背山は後水尾上皇と女御たちが手を染めた経石が埋納されている場所であった。探山は、和歌の浦のこのような特別な意味を持つ場所のリアルな当世景観に敢えて老若男女の擬古の風俗を融合させることで、和歌の浦が時代を超えて存在する名所であることを表現しようとしたと思われるのである。

#### (4) 結語

すでに述べたように、鶴澤探山は宝永度女御御殿(全体)の障壁画として多くの作品を手掛けており、その内、女御御殿姫宮御殿上段の富士三穂図と中段の住吉図及び和歌浦図が二条城二の丸御殿黒書院帳台の間障壁画として転用されたことが明らかになっている訳であるが、今後、これらの探山の作品については、美術史の立場から更に研究が進められるものと考えられる。本稿では、社会誌の立場から和歌浦図の読解が試みられたが、このことから改めて浮かび上がってくる名所としての和歌の浦像は、時代を超えて大勢の人々が訪れる開放的な海辺の聖地というものであった。探山の和歌浦図から読み取られたこのような近世和歌の浦のイメージは、徳川氏によって権威的に囲い込まれたとする裏付けのない“常識的理解”とは全く異なる和歌の浦理解に道を開いており、近世における和歌の浦を理解し、認識する上で重要な意味を有する。

また、以上のこととも関連して、和歌浦図が御所の障壁画で唯一現存するものであることにも留意して置きたい。頼宣による妹背山と玉津島神社の景観整備がなされて間もない延宝度の御所造営で和歌浦図が描かれたことが知られているものの、残念ながら消失しており、再び見ることは出来ない。探山の和歌浦図は、この延宝度の和歌浦図を伺い知るための手掛かりとなり得る。

御所の障壁画であるにも関わらず、探山の和歌浦図が実景図による名所風俗図として描かれていることは、本稿において確認されるべき強調点の一つであった。探山の和歌浦図は、紀州本東照宮縁起以来の和歌浦実景図の系譜上に重要作品として位置付けられねばならないが、そのより深い理解には、和歌の浦を描いた実景図の系統的な調査研究が必要になる<sup>(註23)</sup>。

探山の和歌浦図が描かれる際の粉本の存在如何については、『画典通考』における橘守国の「和歌浦名所」図が参照されるべきことはすでに検討した通りである。橘守国の「和歌浦名所」図は、それ自体が実景図に基づく和歌浦図として読み解かれる必要があり、絵手本として版行されたことの意味するところも大きい。江

戸で版行された『和歌名所記』(享和2年[1802])の挿絵は、守国の和歌浦図を写したものである。守国の影響は、『紀伊国名所図会』における和歌浦図にも及んでいると考えられるのであるが<sup>(註24)</sup>、このことについての考察は、今後の課題としたい。

【謝辞】修復建築家の鳴海祥博様と元離宮二条城管理事務所には、二条城二の丸御殿黒書院帳台の間の障壁画(原画と模写)の見学にあたりお世話して頂き、また、原画の画像の使用を許して頂きましたこと、心よりお礼を申し上げます。和歌山市立博物館の近藤壮様には、「和歌浦図屏風」について貴重なご助言を頂きましたこと、心よりお礼を申し上げます。また、和歌山市立博物館と早稲田大学図書館には、所蔵貴重資料の掲載を許可して頂きましたこと、心よりお礼を申し上げます。

尚、本研究はJSPS科研費24530627の助成を受けたものです。

#### 注

1. 平安期の藤原公任の玉津島の紀行文(『公任家集』『平安私家集 新日本古典文学大系二八』大養廉・後藤祥子・平野由紀子校注 岩波書店1994年 所収)や津守国基の歌集(『津守国基集』群書類従 253巻 所収)から近世後期における不老橋の命名に至るまで、不老(若さ)と再生(蘇り)のシンボルとする和歌の浦観を連綿として辿ることができる。
2. 例えば、和歌山県立博物館に所蔵されている各種の和歌浦図屏風や、天橋立和歌浦図屏風である。
3. 和歌浦図屏風(和歌山県立博物館蔵)は、紀州研本和歌浦図屏風と近似した作品であるが、これもその一つである。
4. 鶴澤探山の経歴及び鶴澤派については、野口剛の「鶴澤派研究序論—主に探山と探鯨に関する文献的考察—」、「京都府立総合資料館鶴澤資料の紹介」が詳しい。尚、鶴澤探山の生年については、五十嵐公一の『近世京都画壇のネットワーク—注文主と絵師—』(吉川弘文館 2010年 214~220頁)に詳しい考証がある。
5. 現在は、模写(古色復元模写)された絵に入れ替えられており、原画は収蔵庫に保管されている。模写された絵に張り替えられる際に、住吉図の前にあった和歌浦図の一部が住吉図の後ろに入れ替えられている。図IIで言えば、Ea(3)は、模写に入れ替えられる前はEa(1)の位置にあった。
6. 筆者は20年ほど前に、この絵を故多田道夫和歌山大学名誉教授他の人たちと共に見学したことがある。当時この絵の修復に当たっておられた故川面遼一氏のご案内によるものであったが、私たちにはひと目で和歌の浦の図であることは明らかであった。この絵については、建築史の西和夫氏、小沢朝江氏の研究により宝永度女御御殿からの転用画であることが確認され(西和夫・小沢朝江「二条城二の丸御殿の研究(上)(下)」国華1167、1171号、1990年3月、6月)、更に2005年に小沢朝江氏により鶴澤探山が宝永度女御御殿姫宮御殿中段に描いた障壁画が転用されたものであることが明らかにされている(小沢朝江 2005年)。
7. 女御御殿姫宮御殿障壁画当時の復元については、西和夫氏と小沢朝江氏によって試みられているが(西和夫・小沢朝江 1990年、西和夫 1999年、小沢朝江 2005年)、両氏の復元と本文で取り上げている橘守国の絵(『画典通考』巻之三の



- 「和歌浦名所」を参考にした場合の復元とは相違がみられる(注14参照)。従ってまた、和歌浦と住吉とが中段の間にあったことから住吉の場合にも相違があることになるが、復元は、今後の課題の一つである。
- 和歌の浦の景物としておなじみのものである。考証には、本文で取り上げている『画典通考』の巻之三に収められている橘守国の「和歌浦名所」、和歌浦図屏風(和歌山市立博物館蔵)及び『和歌浦—その景とうつりかわり—』(和歌山市立博物館 2005年)の關係箇所を参照した。
  - 紀三井寺と妹背山・玉津島との間には渡し船があった。元禄2年(1689)に和歌の浦を訪れた貝原益軒は、玉津島、妹背山を見たあと舟で紀三井寺に渡っている(『南紀紀行』(『益軒全集第七巻』益軒会編纂 明治44年 1911年 所収))。
  - 水面に掛けづくりにした眺望所で大勢の者が自由に利用できたというので念頭に浮かぶのは、西湖の湖心亭である。日本の近世期、あるいはそれ以前のもので思い当たるものがない。異例のものであったと思われる。
  - この考証には、本文で取り上げている『画典通考』の巻之三に収められている橘守国の「和歌浦名所」、和歌浦図屏風(和歌山市立博物館蔵)、『紀伊国名所図会』及び『和歌浦—その景とうつりかわり—』(和歌山市立博物館 2005年)の關係箇所を参照した。
  - 本文で取り上げている橘守国の絵(『画典通考』巻之三の「和歌浦名所」)には、三つに分かれた特徴のある形状の三断橋が描かれている。探山から4代目の鶴澤探泉が描いた「江之島図」(『彩—鶴澤派から応挙まで—』兵庫県立歴史博物館編 2010年 39頁)は、探山の和歌浦図を描くのに用いたと思われる粉本と同じか類似のものをういて描かれたと考えられるが、三断橋は守国と同じように描かれている。探山は意図してシンプルな木の橋にしたものと考えられる。
  - この考証には、本文で取り上げている『画典通考』の巻之三に収められている橘守国の「和歌浦名所」、和歌浦図屏風(和歌山市立博物館蔵)、『紀伊国名所図会』及び『和歌浦—その景とうつりかわり—』(和歌山市立博物館 2005年)の關係箇所を参照した。
  - 西和夫氏と小沢朝江氏は絵の復元を試みており、この後に現在「住吉図」の一部になっている図が続くとしている。しかし、橘守国の「和歌浦名所」との照合では、「和歌浦図」はここで終わっている。
  - この題目石には以下のような伝説がある。  
「御寶塔御草建のとき、竹本丹後なるもの、海濱にして一つの奇石を得たり。人歩を集めてこれを曳けども動かず。又傍に同形の石あり。土人此雙石をして夫婦石といふ。さる事もやと、雙石を一度に曳かしむるに、易々とひき得たり。衆人奇異のおもひをなさずといふことなし。依って雄石に御法號を刻みて、御寶塔に安置し、雌石に『妙法蓮華經』の梵語をさぎみて、山下に建つる。この雌雄の石によって妹背山とはあらたむるとぞ。」(『紀伊国名所図会(一)』歴史図書社版 266~267頁)
  - 『紀伊統風土記』(天保10年(1839))にも同様の記述がある(『紀伊統風土記(一)』歴史図書社版 492~493頁)。  
尚、平成16年~17年の発掘調査で、15万個を超える経石が埋納されていたことが分かっており、お万の方の遺髪が埋納されていたことも確認されている。また、上皇の経石が入れられたとされる石函と思しきものが発掘されている(和歌山県教育委員会 2010年)。
  - 「或人は文王の囿に比す」とされているところの「文王の囿」とは、『孟子』の冒頭で引かれている「文王の囿」の故事のことである。かつて周の文王(覇道〔武力による治世〕では

- なく王道による治世〔徳治〕を行ったとされる)が庭園を作ろうとした折に民衆が進んでこれにあたり、文王は民衆ともどもその庭園の佳境を楽しんだ(共楽)というのがそれである。このような故事に喩えられて、妹背山と観海閣は、従ってまた和歌の浦は、身分を越えて万人に開かれた特別な場所であるということが言い伝えられていたということであろう。
- 観海閣は民衆が自由に利用できる施設であったが、その修理・維持は紀州藩が行った。しかし、幕末の慶応2年(1865)に台風で倒壊した折には、藩にはゆとりがないとして、城下町人に再建を委ねた。その時の理由は、観海閣は民衆が自由に使うことのできる施設であるということであった。城下町人もこれを受け入れ、一年後に再建している(米田頼司 2011年)。また、明治に入って藩の消滅後は、和歌村が実質的な修理・維持を行ったが、観海閣の修理問題が契機となって、明治28年には太政官布告に基づく和歌公園が設置されるに至っている(米田頼司 2010年)。
  - 鶴澤派4代目の鶴澤探泉は、探山が和歌浦図で描いた妹背山をほぼ同じ図様で描いている。「江之島図」とされているものがそれである。『彩—鶴澤派から応挙まで—』(兵庫県立歴史博物館 2010年)には、妹背山を江之島であるとして、「画面右下、舟の中に六人の人物が描かれている。先頭の人物はこれから向かう江之島を指差し、江之島には九人の参拝者が描かれている。微細だが的確な描写である。江之島の地形も丁寧に描かれているが、これは何か他の画像を参考にしたのである。」(145頁)と作品解説されている。
  - 橘守国の経歴などについては、浅野秀剛の論考(1984年、1985年A、1985年B)を参照されたい。
  - 和歌浦図屏風(和歌山市立博物館蔵)は狩野派の手になるものと見ることができ、下絵のようでもある(和歌山市立博物館の近藤壮氏のご教授による)。とすれば、和歌浦図屏風は探山や守国が用いた粉本に類似したものと考えられる。
  - 宝永度女御御殿の造営に際して探山が描いた絵の内、「富士三穂図」、「住吉図」、「和歌浦図」は代表的な名所の図であり、現在二条城二の丸御殿黒書院帳台の間の転用画としてみることができるのであるが、「富士三穂図」と「住吉図」は、特に実景を描き込むという意図を読み取ることの出来ないものである。これに対して、「和歌浦図」の場合、実景で描かれている妹背山と玉津島神社は際だったものになっている。
  - 近世における和歌浦図の内、実景図で描かれたものの起点として位置付けられるのは、紀州本東照宮縁起である。探山の「和歌浦図」も守国の「和歌浦名所」もこの系譜上にある。これに対して、新たな画期となるのは、18世紀半ば以降に描かれる桑山玉洲や野呂懐石らの写生画である。18世紀末には、白雲が写生画を残しており、司馬江漢の遠近法による写生画もある。実景図の系譜を辿ることは、近世期に和歌の浦の景観が如何なるものとして把握されたのか、また、そこにどのような変容が見られるかを考える場合に極めて重要な作業になる。
  - 守国の「和歌浦名所」と『紀伊国名所図会』における和歌の浦の全体図は、同じ構図である。守国の画帖がその後に及ぼした影響力を考えると、『紀伊国名所図会』への影響も当然検討されねばならないであろう。

〔文献〕

- 浅野秀剛 1984年「橘守国とその門流(上)」浮世絵芸術 82  
24~26頁  
浅野秀剛 1985年A「橘守国とその門流(中)」浮世絵芸術 83

13～17頁  
 浅野秀剛 1985年B「橘守国とその門流(下)」浮世絵芸術 84  
 11～15頁  
 五十嵐公一 2010年A「論考」『彩－鶴澤派から応挙まで－』「彩」  
 実行委員会 130～138頁 所収  
 五十嵐公一 2010年B『近世京都画壇のネットワーク－注文主と  
 絵師－』吉川弘文館  
 大阪市立美術館 1981年『近世の大阪画壇』  
 小沢朝江 2005年「二条城二の丸御殿大広間・黒書院帳台の間転  
 用壁画の前身建物について」日本建築学術講演梗概集(近畿)  
 京都文化博物館学芸課 2004年『近世京都の狩野派展』京都文化  
 博物館  
 河野通明 2000年「橘守国『絵本通宝志』の基礎研究(上)」商経  
 論叢 神奈川大学経済学会 Vol.36 No.11～28  
 佐々木丞平 1996年『平成8年春季企画図録 江戸期の京画  
 壇－鶴沢派を中心として－』  
 全長 元文4年(1739)『和歌浦物語』(『和歌浦物語』柏原卓編・  
 和泉書院版 1996年)  
 鈴木廣之 2007年『名所風俗図』日本の美術No.491 至文堂  
 26～47頁  
 蘭田香融 1997年「海禅院多宝塔と日護上人」『和歌山地方史研  
 究』31・32号 1～29頁  
 菅原雅明 2001年「和歌浦の妹背山多宝塔」和歌山県立博物館研  
 究紀要 6号16～28頁  
 知念理 2005年「〔巖島図障壁画一覽〕補遺」広島県立美術館研  
 究紀要 第8号 1～5頁  
 知念理 2007年「東京国立博物館『巖島・和歌浦図』－右隻・和  
 歌浦図の諸問題－」広島県立美術館研究紀要 第10号 1～11  
 頁  
 鶴崎祐雄・佐貫新造・神道宗紀 1992年『紀州玉津島神社奉納和  
 歌集』玉津島神社  
 中山創太 2012年「浮世絵師にみる絵手本利用の一考察－中  
 国画譜を源流とする歌川派の作品を中心に－」東アジア文化  
 交渉研究 5 389～405頁

西和夫 1999年『建築史研究の新視点1 建築と障壁画』中央公  
 論美術出版  
 西和夫・小沢朝江 1990年「二条城二の丸御殿の研究(上)(下)」  
 国華1167号、1171号  
 野口剛 2003年A「鶴澤派研究序論－主に探山と探鯨に関する文  
 献的考察－」京都文化博物館紀要 朱雀 第15集 1～26頁  
 野口剛 2003年B「京都府立総合資料館鶴澤家資料の紹介」京都  
 文化博物館紀要 朱雀 第15集 71～83頁  
 野口剛 2004年「鶴澤探山の画歴－失われた御所障壁画－」『近  
 世京都の狩野派展』京都文化博物館 162～165頁  
 兵庫県立歴史博物館 2010年『彩－鶴澤派から応挙まで－』「彩」  
 実行委員会  
 本島知辰 『月堂見聞集』『続日本随筆大成 別巻2』近世風俗  
 見聞集 2 月堂見聞集 森銃三・北川博邦編 吉川弘文館  
 所収  
 米田頼司 2009年「名古屋城障壁画に描かれた和歌浦天満宮と  
 その社頭」『和歌浦天満宮の世界』和歌山大学紀州経済史文化  
 史研究所編 清文堂出版 115～152頁 所収  
 米田頼司 2010年『和歌祭－風流の祭典の社会誌－』帯伊書店  
 米田頼司 2010年「和歌の浦と公園－明治期の景観保全活動と  
 和歌公園の成立をめぐる－」和歌山大学教育学部紀要人文  
 科学編 61集 55～78頁  
 米田頼司 2011年「パブリックガーデンとしての和歌の浦と民  
 衆」『和歌の浦－その原像を求めて－』和歌山大学紀州経済史  
 文化史研究所編 清文堂出版 181～203頁 所収  
 和歌山県教育委員会 2010年『和歌の浦学術調査報告書』  
 和歌山市立博物館 2005年『和歌浦－その景とうつりかわり－』  
 和歌山大学紀州経済史文化史研究所 2012年『増補・改訂版 和  
 歌祭－みる・きく・たのしむ－』30～33頁  
 橘守国(岡子雉 著述・橘守国 図画)1729年『画典通考』(早稲  
 田大学図書館によりインターネット上に公開されている。  
[http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko08/bunko08\\_d0255/index.html](http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko08/bunko08_d0255/index.html))